

こころ日記「ぼちぼち」その③

「家族」を考える

「家族」の勉強を始めて長くなる。教員を続ける中で、自己覚知など援助職としてのスキルを身につけたいと、京都国際社会福祉センターに随分と通った。そんな時センターの講座で出会ったのが「家族療法」だった。心理にはあまり興味はなかったが、家族が持つパワーや社会システムの中の家族の姿など、飽きることなく学び続けられている。今までも子どもたちの家族のことを語ってきたが、少し自分の家族ことも…と思う。

ステップファミリー

振り返れば、長い間思春期の子どもたちと暮らしてきたなと思う。中学校現場から退いた今も、学校に行けない子どもたちとの時間を過ごす。

人生の大きな節目である「思春期」。改めて考えると、からだも心も子どもから大人に変化していく人生の中での大イベントだ。中学1年から卒業までの3年間の子どもの成長ぶりには、目を見張るものがある。その姿を見るのが何よりの楽しみだった。善いにつけ悪いにつけ、色々な思春期のあり方を間近で見ることでもできた。

どんな人も、必ず通る道。大人たちは、何もなかったような顔をしているが、人それぞれ家族の中の思春期にまつわるエピソードがきっとあったはずだ。

*

担任をしていると、ステップファミリーに出会うことがよくあった。

再婚家庭などは昔からあるし、珍しくもないが、最近は、多くなっていると思う。

子どもが小さい時に離婚した父親、母親は、シングルマザーあるいはシングルファザーとして頑張っている。しかし、人は色々な関係性の中で生きている。好きな人ができれば一緒に暮らしたいとも思う。

思春期にある子どもたちは、今まで母親だった父親だった人が恋愛をし、新しいパートナーと生活をするために、たいてい戸惑いと不安を感じる。

*

マリヤは、中学1年まで小学6年の弟と母親との暮らしをしていた。父親と母親は、マリヤが低学年のころに離婚をしていた。母親は、パートをしながら2人の子育てに奮闘していたが、職場で知り合った15歳年下の男性と再婚をし、まもなく妹が生まれた。

マリヤは人との関りが苦手で、学校生活では目立たない生徒だった。絵を描くことが好きで、美術部では積極的に活動していた。しかし、新しい父親との生活が始まったと同時に、少しずつ学校を休むようになっていった。

20代の義父は、夜遅くまでゲームをしていたりテレビを見ていたり、マリヤは毎日その音に悩まされていた。しかも夜中の赤ん坊の泣き声にはイライラした。

狭いアパートでは、弟との相部屋でもあり、プライバシーが守られる環境ではなかった。

学校を休む理由は、頭痛と耳鳴りだった。放課後登校をしたときの面談で、彼女はポツリポツリと自身のことを話してくれた。

将来は漫画家になりたいこと。高校に行ったら、母親を助けるためにアルバイトをしたいなど。家族のことについては、弟が万引きをし始めたことを心配そうに話し

た。義父とのエピソードはなかったが、妹のことを「全然かわいくなんかない。ホンマうるさいねん」と呟く…。今の彼女の環境を変える手立ては見つからないが、担任に話すことで、気持ちが楽になればと思う日々だった。

母親は、新しいパートナーとの関係を気遣い、マリヤと向き合うことを避けている様子だった。マリヤの症状は、病院に連れていくも良くはならなかった。心配だった弟は、近所に迷惑をかける事件を起こすようになり、母親は弟への対応に追われるようになっていった。

今の生活を維持させるには、黙って今の環境を受け入れるしかなかったし、自分の思いを母親にぶつけることはできなかったのだろう。彼女の心は、内へ内へと沈んでいったように見えた。

マリヤは3年生になり、少しずつ進路に目を向けるようになり、どうにか通信制の高校に入ることができた。その後のマリヤのことはわからないが、自立への道を歩いているだろうかと思う。

わたしの場合

私の母は、5人の娘がいる父と結婚した。やがて兄が生まれ、3年後の父53歳、母35歳の時に私が生まれた。今というステップファミリーである。

小さい時は、家にはたくさんの大人がいて、しかもよくしゃべる人たちはばかりだったように思う。大きくなってようやく家族の関係が理解できたのを覚えている。

父は先妻と離婚したあと、子育てや家事に困り、早々と母と再婚したのだろう（私の想像だが…）。母と上の義姉たちとは年が近く、私が生まれたときは、3番目の義姉まではすでに結婚をしていて家にはいなかった。実家に残っていた妹たちのことを随分と心配していたと思う。4、5番目の義姉たちは、まだ高校生か中学生だったはず…。

今、その当時の義姉たちのことを思うときがある。



兄は、父親にとっては6番目にして初めての男の子。とても喜んだらしいが、次に生まれた私が女の子だったので、さぞかしがっかりしたことだろう。私の名前は、父の知人がつけたらしく、その人が書き記した姓名判断の紙が、父の死後見つかった。

新しい母親が産んだ幼い子が二人。さぞや騒々しかっただろう。病弱だった兄は、いつも入退院を繰り返していたし、生まれだての私の世話はどうなっていたのかと思いつめぐらすが、聞かされていたのは、義姉たちが世話をしてくれたとのことだった。

思春期だった義姉たちは、自由に自分の楽しいこともしたかっただろうに…。いまでいうヤングケアラーか？幼子の面倒はさぞかし辛かっただろうし、嫌だっただろう。



義姉のこんなエピソードがある。5番目の義姉が、修学旅行に出かけたこと。実母が末っ子である義姉に一目会いたいと、宿泊先に駆けつけた。実母は、不憫に思ったのか、ちょっとした品を色々持たせてくれた。しかし、父親から実母と面会したことを咎められると思い、泣きながらそのすべてを捨てて帰ったそうだ。

いつどこで誰から聞いたのか覚えていないが、その光景を思い浮かべると、今なら義姉の心情を想像できる。

義姉は、そうすることで家族のバランスを保とうとしたのかもしれない。

つづく